

吉田城址 発掘現場公開資料

令和5年7月8日(土) 主催: 豊橋市文化財センター

時間 10:00 ~ 12:00、13:00 ~ 15:30

吉田城址とは?

戦国時代に築かれた今橋城は、今川義元による支配の頃に「吉田城」と改められ、徳川四天王筆頭の酒井忠次や、現在の姫路城の姿を築いた池田照政(後の輝政)といった名高い武将が城主となり、東三河地方の政治の中心を担いました。平成29年には(公財)日本城郭協会によって『続日本100名城』に選定されるなど、豊橋市を代表する文化財として、市内外から多くのお城ファンが訪れるようになりました。こうした状況の中、令和3年度末に吉田城址は遺構を後世へ守り伝えるために“豊橋市指定史跡”になりました。さらに、令和4年度末には吉田城址の活用整備の基本方針である『吉田城址保存活用計画』を策定しました。

吉田城址は、廢城から約150年を経ており、石垣や土壘などの損傷が各所で確認できます。令和元~3年度には石垣が立て続けに崩落し、吉田城の遺構が深刻な状況にあることが広く知られました。

これらの崩落箇所に共通するのは、近年まで石垣の直上に大木が成長していたことです。全国的にも樹木を原因とする石垣の崩落事例は数多く、更には近年頻発する大雨によって、被害が広がる可能性があります。今後は、公園利用者の安全確保と吉田城址の遺構保護のため、経過観察とあわせ必要に応じて樹木の伐採、また伐採後の切株の管理や雨水対策を講じ、予期し得る危険を軽減していくことが重要です。

南多門とは?

南多門は、本丸南側にL字形に築かれた「櫓門」で、一部が石垣の上に建てられました。今回調査する東側の石垣部分は東西6.5m、南北18.7m、高さ4.5mになります。

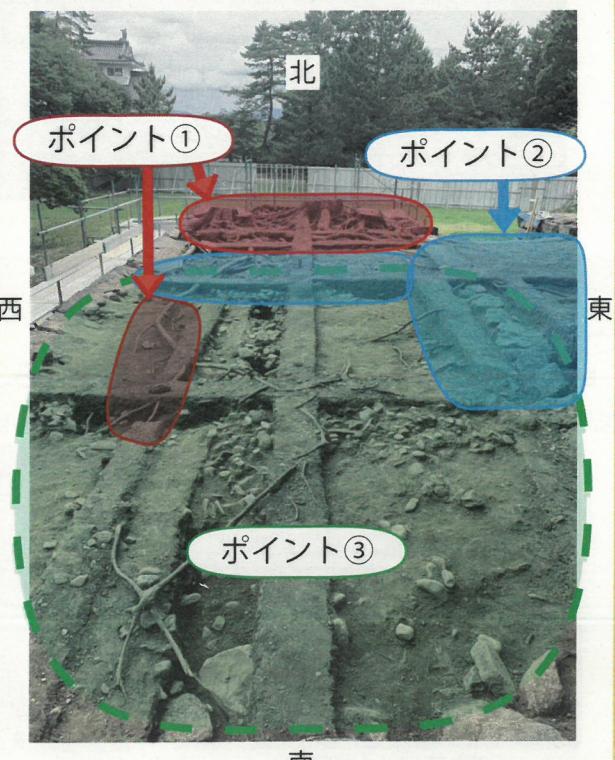
この石垣は孕みや石材の割れが見られるといった、崩落の危険があります。そのため解体修理を行いますが、そうすると江戸時代のオリジナルの構造が失われます。そのためオリジナルを記録するとともに、崩落の危険が高まった原因を探ります。計4回行う調査のうち、今回はその第1弾を見学いただきます。



吉田城址復元鳥瞰図(制作:香川元太郎)に加筆

ここ見てポイント!

注目してほしいポイントは以下の3点です。
現地でも、注目してみてください!



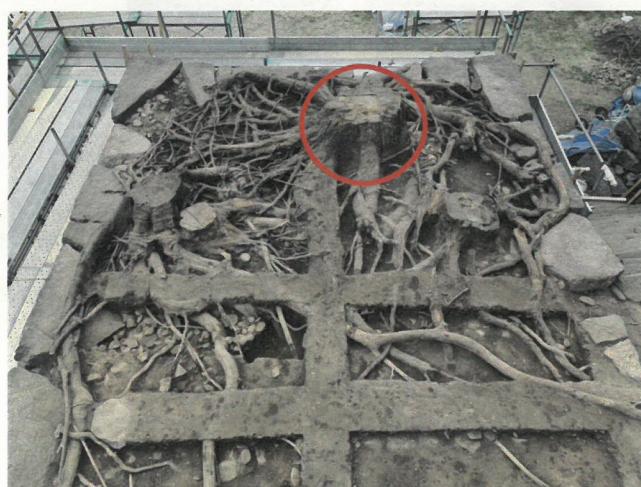
重要!!

あなたが発掘現場を見るための 受付番号 :

ポイント① 根の影響で...

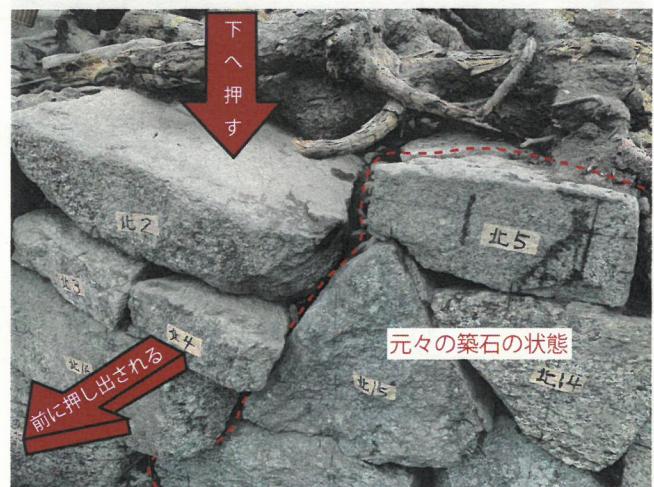
南多門には調査前まで、黒松2本を含む、計5本の木が生えていました(①)。いずれも樹齢30~40年ほどですが、最も北側に生えた黒松は最大径約90cmを測ります(①の○)。北側の木は、昭和50年(1975)頃にはなかったようです。また、黒松の根に押さえつけられたことで、築石が下へ、さらに外側へズレている箇所を確認しました(②)。

石垣の中央付近では大きな孕みが確認されていましたが(③の赤い部分)、その上面から木の痕と考えられる腐食土を確認しました(④)。古写真を見ると、巨大な松がこの付近に見られます(⑤の○)。この影響で、石垣が孕んだと考えられます。さらに、③の赤い部分の左側にも黄色で若干の孕みが示されていますが、その上面には①の木々が見られます。

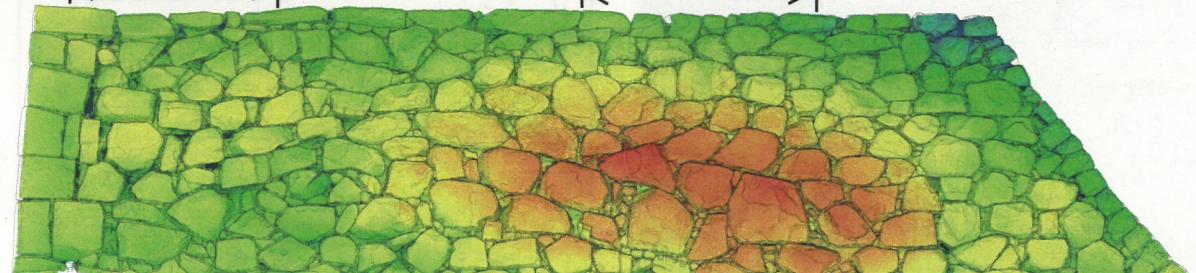


① 北側の木根の密集(上から)

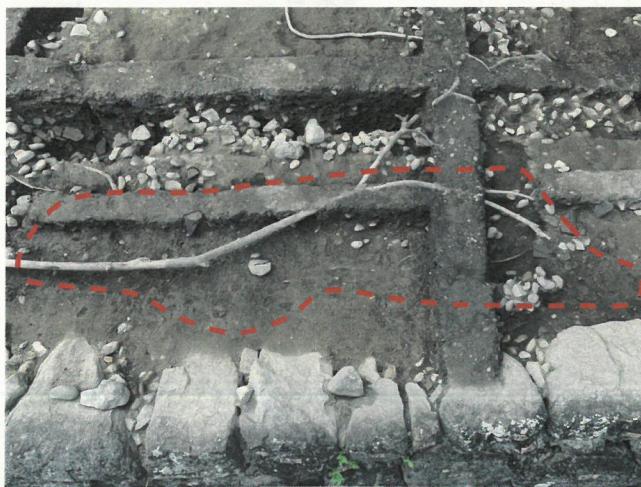
①の木の範囲



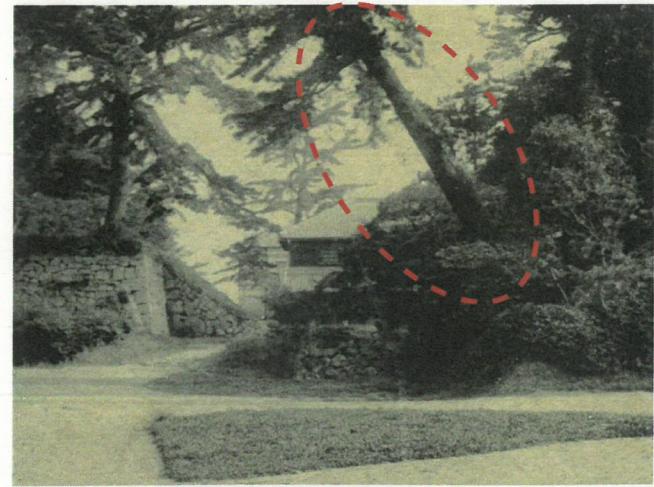
② 根により押し出された築石



③ 西側の石垣オルソ画像(赤い部分が最も孕みが大きな箇所)



④ 木の痕跡(点線部分)



⑤ 古写真(明治43年以降)

ポイント② 石列を確認!!

東側から、南多門の櫓部分が建てられた石垣と土壘を分ける形で、南北に並ぶ石列を検出しました(①)。この石列の上には、横にした木材(土台)が据えられたと考えられます(②)。石垣上の櫓部分は、石垣の天端や礎石の上に碁盤の目状に木材を組んだ「土台」と呼ばれるものを作り、その上に柱が建てられたと考えられます(③)。同様な事例は松江城天守などで見られ、掛川城天守や西尾城丑寅櫓も、同様な構造で復元されています。さらに、南多門の西側に築かれていた、もう一つの櫓部分が建てられていました石垣へ伸びる形で、東西に並ぶ石列と礎石と考えられる石材を確認しました(④)。

南北石列は北側の石垣と一直線に並びますが、南側の石垣とはズレます(⑤)。これは、南側の石垣が江戸時代後期の地震で崩落し、積み直されたためと考えられます。



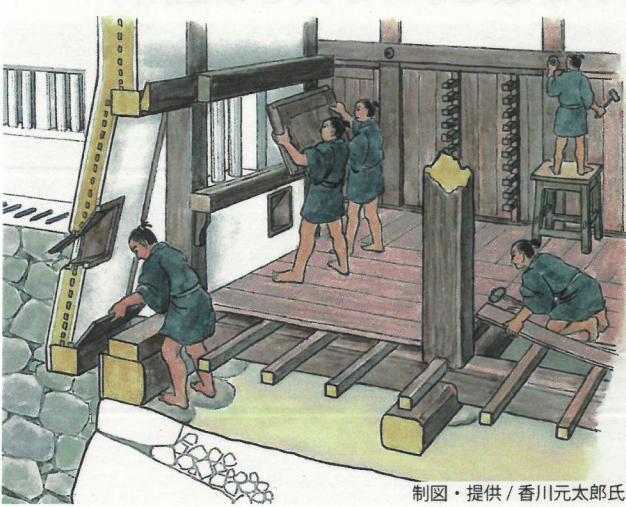
① 南北石列



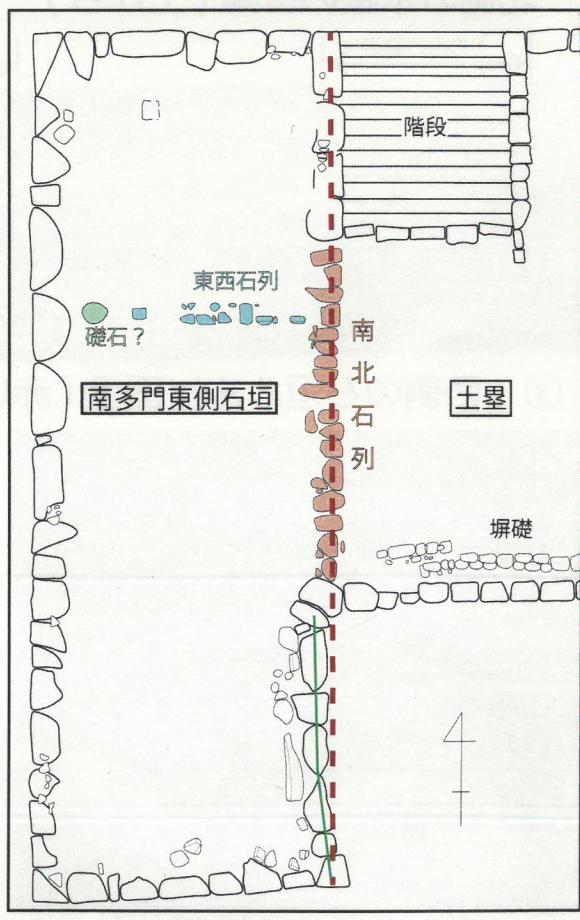
④ 東西石列と礎石



②[参考] 石列と土台(掛川市横須賀城番所)



③[参考] 櫓の土台(建設風景)



⑤南北石列と南側石垣のズレ(模式図)

ポイント③ 積み直しの痕跡?

私たちが見ている石垣の裏側には、裏込め石(栗石)と呼ばれる、拳大の礎が詰められています。西側の裏込め石の充填幅は、築石(表面の石材)から2m以上ありますが、南側は約0.3mと、大きな差があります(①・②)。幅の違いは、機能差や時期差などを考えることができます。例えば姫路城では裏込め石の幅が平均0.5~1mある中、内船場蔵南石垣では0.3m以下で場所により途切れているところがありました。そのため、江戸時代後半以降の積み直しが指摘されており、南多門でも同様となる可能性があります。

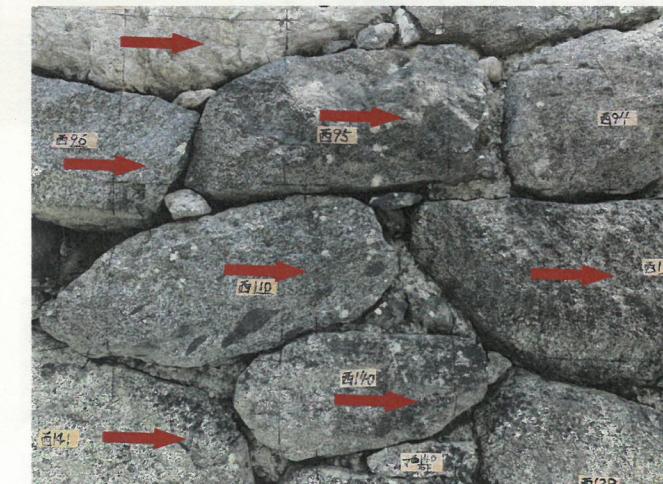
さらに、西側の石垣は長方形の築石を横方向に積みますが(③)、南側はほぼ同じ大きさの築石を斜めに重ねながら積みます(④)。これは「落し積み」と言い、幕末頃に誕生する積み方で、近代に盛行します。ポイント②と合わせ、南側が積み直されたことが分かります。



① 西側の裏込め石



② 南側の裏込め石



③ 西側の石垣



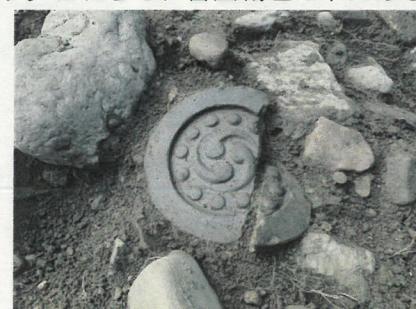
④ 南側の石垣(落し積み)

出土遺物

出土遺物は少量で、瓦が主体です。瓦は文様から、ほとんどが江戸時代の物と考えられます。そのほか、古代の須恵器や土師器・陶器の破片が少量見られます。これらは、吉田城址の下にある飽海遺跡の土を盛ったためと考えられます。



軒丸瓦(左)と桟瓦(右)



軒丸瓦



軒平瓦